

1900 年パリ万博と「第 1 回図画教育に関する万国会議」

意匠学会

並木誠士（京都工芸繊維大学）

「アール・ヌーヴォーの勝利」ともいわれる 1900（明治 33）年のパリ万博は、文字通り新しい芸術の気運が横溢するなかで開催された。パリでは、サミュエル・ビングの「アール・ヌーヴォーの店」が人気を博していた。このときにパリを訪れた多くの芸術家—浅井忠・小山正太郎・竹内棲鳳（栖鳳）など—がこの新しい空気にふれている。この万博を境に、日本でも「デザイン」に対する意識が一気に高まることになる。

もちろん、日本国内をみれば、明治 20 年代から図案教育や図案改良の必要性が認識されるようになり、明治 30 年代にかけて徐々に図案を教える場が設置され、また、図案募集や図案集の刊行が目につくようになる。そのようななかでのパリ万博が、当時の人びとに大きな刺激となったことは明らかである。

しかし、この 1900 年にパリ万博と共催というかたちで「第 1 回図画教育に関する万国会議」が開催されたことは、あまり注目されていない。図画を義務教育に入れることが論じられたこの会議でのテーマのひとつが「装飾図案の通俗教育」であった。そして、この会議に日本から出席したのが、のちに東京美術学校の校長になる正木直彦と洋画家の黒田清輝であった。彼らはアール・ヌーヴォーの空気にふれただけではなく、「装飾図案」を教育するという、当時日本国内でもまさに大きな関心事であった内容について、多くの事例報告や議論を聞いたはずである。そして、そのときのパリには、1902（明治 35）年に設立されることになる京都高等工芸学校設立準備のために中澤岩太（京都高等工芸学校初代校長）が出張しており、また、その中澤の要請により同校図案科の初代教授になる洋画家の浅井忠もまたパリにいた。

正木直彦・中澤岩太・黒田清輝・浅井忠の 4 人は、以後、日本のデザイン教育に大きな影響力を発揮することになる。その意味でも、1900 年のパリ万博を契機に日本のデザイン教育が新しい一歩を踏み出したといえることができるだろう。